

第 部 第 1 章のポイント

2005年の世界経済は2004年に比べ成長率が低下するが着実に回復

- 2004 年の世界経済の成長率は 3.9% と見込まれるが、2005 年は景気を牽引してきたアメリカ与中国の成長率の低下の影響等から、3.2% 程度となるものとみられる。

1. アメリカ経済の成長率は巡航速度へ

- 2004 年のアメリカ経済は原油価格の高騰にもかかわらず、力強い内需に支えられて 4.4% と高い成長率となった。原油高による物価への影響が懸念されたものの、年全体としての物価上昇圧力は限定的なものにとどまった。2005 年の成長率は 3 % 台半ば程度と前年に比較して多少低下するものの、依然、潜在成長率である 3.2% を上回るペースで成長するものとみられる。
- 2004 年央は歴史的に低水準となっていた政策金利が、景気拡大の維持と物価上昇圧力への配慮との間の微妙な均衡を維持しつつ、0.25% ポイントずつ慎重なペースで引き上げられた。2005 年に入っても引き続きこのペースは維持されているが、物価上昇圧力の高まりを背景に 2005 年末に向け 4 % 弱程度に引き上げられることが見込まれる。

2. アジア地域は中国を中心に引き続き高い成長が続く

- アジア地域全体の景気を牽引している中国経済は、2004 年の成長率は 9.5% と高い伸びとなつた。とりわけ 1 ~ 3 月期において、固定資産投資全体でも前年比 40% を越える伸びとなつたため、政府の直接的・間接的な引締め政策が実施された結果、年後半には 20% 強の伸びへと低下し、輸入の伸びにも低下がみられた。2005 年に入ってからも、景気過熱懸念は完全には払拭されておらず、政策当局は 8 % 前後の成長率を目標に、マクロコントロールを通じたソフトランディングを目指し、注意深い政策運営を続けている。

3. ヨーロッパ経済は原油高やユーロ高により緩やかな回復

- 2004 年のユーロ圏経済は、年前半は堅調な外需が景気を牽引したものの、年後半は原油高やユーロ高の影響で外需が伸び悩んだこともあり、緩やかな景気回復となつた。内需が好調な、フランス、スペインが比較的高い成長となつたのに対し、内需が弱いドイツ、イタリアは低成長となるなど、ユーロ圏内における景気動向のばらつきがより鮮明となつた。景気の回復は 2005 年も緩やかなものになると見込まれる。英国では内需を中心に堅調な景気回復が続いた。

4. 2005年世界経済の抱えるリスク

- 世界経済が今後抱えるリスクとしては、アメリカ及び中国経済の急減速、原油価格高止まり、アメリカの高水準の経常収支赤字、人民元の大幅な変動等がある。